

2-13-1 伏見城の概要

① 城下の歴史

風光明媚な伏見は、平安貴族たちの別荘地として知られ、その後、太閤秀吉による伏見城築城によって一躍脚光を浴びるようになった。

築城に際して作られた道路や外堀は、江戸期以降にも活用され、伏見は水陸交通の要衝として発展を遂げている。城下町から宿場町となった伏見では、さまざまな産業とともに、酒造りも次第に本格化してゆき、明暦3年（1657）には83軒もの蔵元が15,000石余の酒を生産するようになった。

② 伏見・御香宮神社

この神社の南側に金森長近の屋敷があった。明治以降、伏見の清酒は東海道線をはじめとする鉄道の開通によって、関東から全国へと広がってゆく。築城以来の面影が残る伏見は、「灘」とともに現在日本の二大酒どころとして有名である。

③ 伏見城下図

秀吉時代の伏見は、伏見城下に全国の大名を集めた、まさに「武将の町」で当時の城下の様子を知る史料に「豊公伏見ノ図」がある。徳川家康が伏見幕府を開いた時代の大名配置と錯綜しているが、この絵図をもとに町割の特色を見ると、秀吉の幕閣の五奉行の上屋敷は城内に定められ、次に前田、島津、毛利、伊達などの強豪大名、秀吉側近の大名は城の近くや城下の要衝に上屋敷が定められた。

大名に必要な物資を調達するため、各地から多くの商人や職人が集まり、わずかの間に伏見は日本有数の都市となり、全国各地の人や物資で賑わった。

④ 伏見城の4期区分

伏見城の位置は宇治川を望む通称「指月の丘」の中心地であることから、「指月伏見城」とも呼ばれ、文禄元年（1592）に豊臣秀吉が隠居屋敷として築き始めたものを、秀頼が誕生した後の文禄3年（1594）に本格的に城郭としたことに始まる。同時期に各大名はじめ家臣である武将たちの屋敷も形成されていき、文禄4年（1595）にはほぼ伏見城下町として機能していたと考えられる。

伏見城を中心に家臣の大名はじめ武家屋敷が取り囲むように建ち、特に城の西側の御香宮一帯は秀吉の重臣武将大名の居住区であり、徳川家康はじめ金森長近・古田織部・片桐市正（且元）などの家臣団屋敷が並ぶ。

<第1期> 指月屋敷時代

天正20年・文禄元年（1592）～文禄3年（1594）

○天正19年秀吉は関白職を秀次に譲った。京都の聚楽第が秀次の居城となる。

○文禄元年8月伏見指月の丘に隠居屋敷造営を開始、同2年9月に秀吉が移る。

- 文禄2年、城下に大名屋敷の割り当てを命じ、各大名・家臣の武家屋敷が建ち、移る。
- 同年秀頼が誕生し、秀吉の本城とした。
- 同3年8月城の主要部分が完成。伏見の城下町造営のため寺社・村落を移転。

<第2期> 指月から木幡山時代

文禄3年(1594)～文禄5年・慶長元年(1596)

- 文禄3年拡張工事を開始。朝鮮戦争による秀吉側の疲弊解決と終結目的に明の特使一行を迎える準備をする。
- 同4年秀次自害を受け聚楽第を破却、建物の旧材を伏見城に運ぶ。
- 慶長元年閏7月13日大地震により伏見城天守が倒壊、大名・家臣屋敷も倒壊した。京都全域に被害、犠牲者が多数。大仏殿・東寺・本願寺・興正寺なども倒壊し、死者が多数。(言経卿記(山科言継の日記)・朝鮮征伐記・当代記・義演准后日記(醍醐寺三宝院の義演の日記)・その他の記録史料で克明に伝える。)
- 翌14日から同2年にかけて場所を木幡山に移し、伏見城を新たに再建し始める。

<第3期> 木幡山時代

慶長3年(1598)～慶長5年(1600)

- 慶長3年8月18日秀吉が没。遺言により秀頼の大老職の徳川家康が伏見城の天守に入る。
- 慶長5年7月19日関ヶ原の前哨戦にあたる伏見城総攻撃をして石田三成西軍が攻略、同年8月1日焼失。

<第4期> 徳川家康時代

慶長5年(1600)～元和9年(1623)

- 家康は関ヶ原の戦い後、再建に取りかかった。慶長8年、征夷大將軍任時も伏見城で受け、秀忠・家光3代にわたり伏見城で將軍宣下を受ける。
- 同9年9月家光將軍宣下のため、本丸御殿・大台所・大書院・御対面所を補修。宣下以後は城としての機能は途絶え、家光の代に破却された。天守は二条城へ移築、石垣は大坂城と淀城へ。大手門は御香宮へと移築されている。

リーフレットより